商店街活性化をめざした実践的まちづくり支援のあり方に関する一考察

樋口　一雄[1]・尾﨑　友彦[2]・本田　豊[3]・後藤　正明[4]

[1]非会員　株式会社かんこう技術本部計画部（〒536-0006 大阪府大阪市城東区野江1丁目12-8）
E-mail: higuchi@kanko.cityis.co.jp

[2]非会員　京田辺市上下水道部（〒610-0341 京都府京田辺市薪桑ノ木18）
E-mail: t-ozaki@kyotanabe.jp

[3]正会員　兵庫県阪神北県民局宝塚土木事務所（〒665-8567 兵庫県宝塚市旭町2-4-15）
E-mail: yutaka_honda@pref.hyogo.lg.jp

[4]正会員　株式会社　シティプランニング（〒600-8431　京都市下京区綾小路通新町東入善長寺町143 2F）
E-mail: goto-cp@par.odn.ne.jp

兵庫県西宮市の都心部に位置する阪急西宮北口駅前の「にしきた商店街」は，にぎわいのある商店街に見えるが，実際には生活に密着した店舗が徐々に減少し質的な変化が進むとともに，商店街のメインストリートに自動車が入り込み安心して歩けないといった問題を抱えていた．さらに，地域に深く入ってみると，まちの活性化を担うべき商店街組合の硬直化，まちづくりを実践する「にしきた街づくり協議会」の高齢化などまちの運営上の問題もあり，漠然とした不安が漂う状況となっている．

このような状況を踏まえ，筆者らは NPO 再生塾の研修活動の一環で，にしきた商店街に対し，あるべき将来像を提案するともに，将来像を実現する第一歩となる交通社会実験として，「にしきたバル」という商店街のイベントに合わせて，車両通行規制と放置自転車対策の仮設駐輪場設置を実施した．

本稿は，筆者らが主体となって取り組んだ交通社会実験の実施に至る過程とその後の動向を報告する．その上で明らかとなった，地域とともに進めるまちづくりの難しさと，地域内での人材の必要性を示すとともに，持続的な商店街の活性化実現に向けて，まちづくりの専門家が地域の組織に対してどのようなまちづくり支援を行うべきかについて考察する．

Key Words：*Shopping District, Machi-zukuri, Transport Social Experiment, Saisei-Juku*

1.　はじめに

“特定非営利活動法人持続可能なまちと交通をめざす再生塾”（以下「再生塾」という）では，毎年，実際のフィールドでのケース・スタディを通じて，数回にわたって実践的な研修を行うアドバンスド・コースを実施している．

2013年度（平成25年度）のアドバンスド・コースでは，阪神都市圏にある中核市・西宮市の都心部に位置する阪急西宮北口駅前「にしきた商店街」を研修フィールドの１つとして取り上げた．

この研修では，めざすべき商店街の将来像を示すとともに，地域課題の解決方策の提案を行ったが，地域課題に対応し，将来像を実現していくためには，取り組みの初期段階では，まちづくり専門家の実践的支援が必要との結論に至った．[1)]

このため，「にしきた商店街」を研修フィールドとした再生塾にしきた商店街チーム（以下，「チーム」という）は，アドバンスド・コースの研修終了後も，まちづくりの専門家集団として継続して地域に入り込み，主体的に交通社会実験の実施に関わるとともに，その取り組みの継続・拡大をめざして活動を続けている．

本稿では，将来像実現の第一歩となる交通社会実

験として，「ゆっくり天国」（車両通行規制による歩行者天国化，及び放置自転車対策のための仮設駐輪場の設置）の実施に至る過程とその後の動向を報告するとともに，持続的な商店街の活性化実現に向けて，まちづくりの専門家としてまちづくり協議会や商店街組合などの地域の組織に対して，どのような支援を行うべきかについて，実践の取り組みを通して考察するものである．

2. にしきた商店街の現状と問題点

「にしきた商店街」は，阪神都市圏にある中核市・西宮市の都心部に位置する阪急西宮北口駅前の北西側にあり，関西の主要ターミナルである阪急梅田駅から 14 分，三宮駅から 20 分という交通利便性に恵まれた場所にある．また，周辺の住宅地は関西の住みたい街ランキング総合 1 位 [2)]となった関西でも有数の人気の高いエリアとなっている．

図-1　西宮市と西宮北口の位置

にしきた商店街は，阪神淡路大震災で比較的震災の被害が少なかったことから，駅前では唯一残った古くからの街並みがあり，震災を契機に新しいまちづくりが行われている他の3つのブロックとは，趣を異にしている．

さらに，周辺住宅地の人気の高さ，交通利便性を備えているため，にしきた商店街においては店舗が移転してもすぐに次の店が決まるほど人気が高く，この場所で店を出したいという経営者が空きを待っている状況である．

このように，にぎわいのある商店街に見えるが，実際には生活に密着した店舗が徐々に減少し質的な変化が進むとともに，商店街に自動車が入り込み安心して歩けないといった状況にあり，次のような問題を抱えている．

①学習塾，不動産事業者などが増加し，まちの魅力が低下する．
②地域住民は，朝夕は通過するだけ，昼間は他のブロックで買物することになり，まちのとのつながりが希薄になる．
③地元以外のチェーン店やガールズバーなどの進出により，まちの風紀が乱れる．
④まちを見守る人々の力（活動）が低下し，不法駐輪も増加する．

3. 街づくり支援の取り組み内容

(1) 取り組み経緯

2013 年度（平成 25 年度）のアドバンスド・コースで「にしきた商店街」を研修フィールドの 1 つとして取り上げて以来，今日まで，図-2 に示すような取り組みを実施してきた．

＜平成 25 年度＞
①アドバンスド・コースにおける検討
（平成 25 年 8 月～12 月）
②検討成果の地元での発表
（平成 26 年 2 月 1 日）

＜平成 26 年度＞
①地元でみちづくりを考える勉強会の開催
（平成 26 年 9 月 19 日）
②商店街への「ゆっくり天国」の企画提案
（平成 27 年 1 月 18 日）
③「ゆっくり天国」の準備（平成 27 年2月～3 月）

＜平成 27 年度＞
①ゆっくり天国の実施（平成 27 年 4 月 18 日）
・歩行者天国および放置自転車対策の実施
②クリスマスでの「ゆっくり天国」の提案
・商店街組合を中心に協議→中止
③第 2 回「ゆっくり天国」の再提案
・街づくり協議会も含めて協議

＜平成 28 年度＞
①第 2 回「ゆっくり天国」の実施
（平成 28 年 4 月 23 日）

図-2　にしきた商店街のまちづくりへの取り組み経緯

(2) 平成 25 年度の取り組み

再生塾のアドバンスド・コースにおける検討結果の将来像をとりまとめ，検討成果を地域に提示した．

a) 将来像の提案

にしきた商店街を一日中にぎわいのある場所にするためには，次の3つの課題への対応が必要であると考えた．

①歩行者の通行の安全性を確保する
②歩行者を滞留させる工夫を図る
③コミュニティの再生を図る

これら課題を解決し，にしきた商店街のにぎわいを作り出すには，商店街の特性である時間帯ごとに異なる来訪者とまちの表情の変化を活かすため，時間軸に着眼し，朝・昼・夜の時間帯ごとの特性を踏まえたにぎわい創出施策を実施することで，西宮北口駅周辺を訪れた人が立ち寄り，歩きたくなる商店街づくりをめざす「ぶらぶら寄り道したくなるにしきた商店街」を将来像として設定した（図-3参照）.

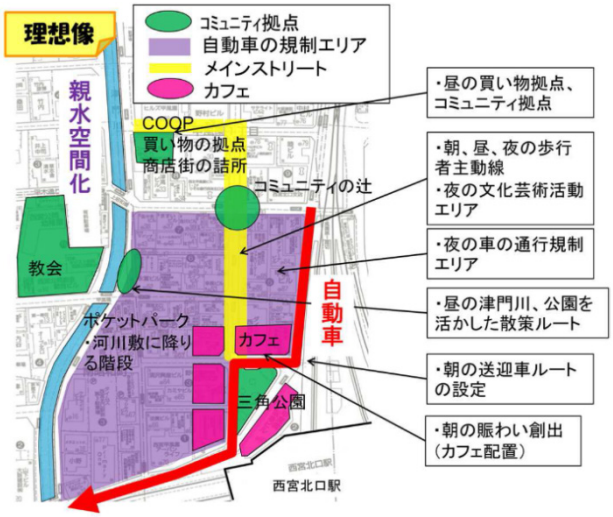

図-3　にしきた商店街のまちづくりの将来像

この将来像「ぶらぶら寄り道したくなるにしきた商店街」を実現するためには，商店街が独自に継続性をもって事業の推進を図ることが望まれるが，商店街が最初から独自で実施することは困難である.

このため，まちづくりが軌道に乗るまでの間は，まちづくりの専門家による助言や援助を受けながら，ステップアップしていく方法を提案した.（図-4）

Step1：社会実験の実施と検証
Step2：住民主導のまちづくり力の醸成
Step3：住民主導のまちづくりの実現

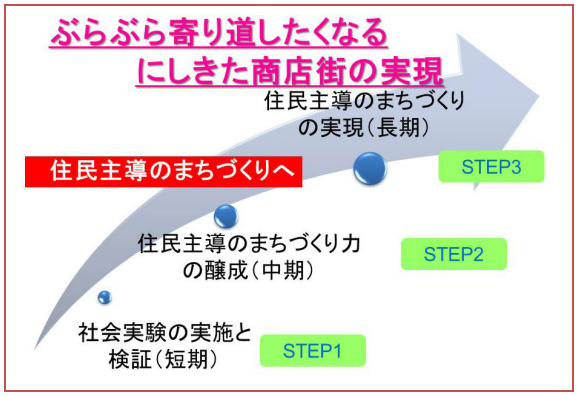

図-4　まちづくりの実現を可能とするステップ

b)　検討成果の地域での発表

「ぶらぶら寄り道したくなるにしきた商店街」を実現するための企画提案を商店街組合や街づくり協議会からなる地域の方々に発表するとともに，地域の方々がこの将来像の実現をめざしたまちづくり活動を実施するのであれば，再生塾メンバーは協力を惜しまない旨を伝えた.

しかしながら，この時点では，再生塾メンバーに将来像を考えてもらったことに対しての謝意はあるものの，まだ，自ら活動するという気運醸成には至らなかった.

(3) 平成 26 年度の取り組み

平成26年度は，将来像の実現の第一歩として，より身近で対策を実施しやすい交通問題から取り組むこととした.

a)　地元でみちづくりを考える勉強会の開催

「みんなで考えるみちづくり～これからの道路政策から～」をテーマとして，地元との意見交換を実施した．この結果，地元からは地域の問題点はいろいろと出せるが解決策が分からない，専門家として解決策は出せるが実践はできない，一方，行政としては，にしきた商店街は早期に解決しなければならないほど重要課題がある地区ではないため，積極的な支援は行いにくいという構図となり，まちづくりの第一歩が踏み出せない状況となっていることがわかった.

b)　社会実験の企画提案

上述のような状況から，地域が主体となり動くためには，「課題に対する具体的な取り組みの効果を見せることで，地域がまちづくりの大切さを気づいてくれる」との仮説を立て，地域が問題視している商店街の交通問題に対する効果を実感してもらうため，車両通行規制の社会実験を提案することとした.

c)　社会実験の実施準備

車両通行規制を行う社会実験の実施に関して商店街組合員の事前アンケート調査では好意的に受け止められていたものの，「実施してくれるのであればありがたい」というスタンスであり，商店街の全面的協力を得ることが出来なかった．そのため，今回は再生塾が主体となり実施した.

ただし，今後地域が主体的に進めることができるよう，「計画書の作成」「行政との協議資料及び届出書」の作成支援をチームが行い，以下の行政や関係機関との協議や周知活動をチームが助言しながら，地域の一部の人に実施してもらい，ノウハウを継承

できるようにした.

・西宮市役所，西宮警察への届出
・地域住民や商店街店舗への周知
・道路利用者，来訪者への周知

(4) 平成 27 年度の取り組み

チームが主体となって，地域を巻き込んで平成27年4月18日（土）に交通社会実験を実施するとともに，次の継続的な取り組みの提案を行った.

a) 交通社会実験「ゆっくり天国」の実施

西宮北口駅周辺では，年に一度4月に「にしきたバル＆マルシェ」（以下,「バル」という）という食のイベントを実施しており，にしきた商店街もバルに参加しており，当日は来訪者が多く集まる.

そこで，社会実験はバル開催に合わせて実施した. また，地域では,「車も人もゆっくり行き来できるまちづくり」をめざす趣旨から，様々なイベント開催時に「ゆっくり」をテーマとしている．それを踏まえ，歩行者天国化をめざす今回の交通社会実験は「ゆっくり天国」と命名した.

第1回「ゆっくり天国」では，地域にその効果を実感してもらうため，具体的に施策を実施した場合の効果と弊害について検証できるよう，当日交通量調査と来訪者へのヒアリング調査を実施した．また,「ゆっくり天国」実施前後に，商店街組合員にのみアンケート調査を実施し意向を確認した.

なお，第1回「ゆっくり天国」の実施効果については，次の4章「『ゆっくり天国』の効果検証」で詳述する.

b) クリスマス時の「ゆっくり天国」実施の提案

第1回「ゆっくり天国」の実施により，地域では車両通行規制の効果を実感できたと思われたことから,「ゆっくり天国」の継続への期待が高まった. そのため，2回目の「ゆっくり天国」をクリスマスに合わせて実施することを提案し，にしきた商店街組合を中心に協議を進めることとなった.

チームが主体となった第1回を踏まえ，地域主体の実施へ移行していくという当初のねらいどおり，第2回はにしきた商店街が主体となって実施することで協議を始めたが，次の理由で断念することとなった.

・クリスマスは忙しいため商店街組合から人を出すことができない.
・仮設駐輪場が確保できない.
・第1回「ゆっくり天国」実施の際，商店街組合員には，客の増加につながる効果を実感してもらえなかった.

c)「ゆっくり天国」の再提案

中止となったクリスマス時の「ゆっくり天国」は，期待していた効果が実感できなかった商店街組合を中心に協議を行い，積極的に地域住民の組織への協力を求めなかった.

この反省に基づき，今度は地域住民の組織である「にしきた街づくり協議会」への積極的な協力を求め，商店街組合と街づくり協議会と協議を行った結果，平成28年4月に実施されることとなった.

(5) 平成 28 年度の取り組み

これを踏まえ，チームはまちづくり協議会主体で平成28年4月23日（土）に実施されることになった第2回「ゆっくり天国」の支援活動を継続的に進めることになった.

4. 「ゆっくり天国」の効果検証

(1) 第 1 回「ゆっくり天国」実施概要

「ゆっくり天国」の実施概要は，表-1，図-5に示す．なお，仮設駐輪場として借用した駐車場は，当日2時～翌2時まで借り上げ，開始時の14時には駐車利用がない状態とした.

表-1 ゆっくり天国実施概要

実施日時
平成27年4月18日土曜日，14時～21時
実施内容
・区域内道路の車両通行止め
・仮設駐輪場の設置，自転車利用者への啓発 注）14時～翌2時
・来訪者へのヒアリング，交通量調査

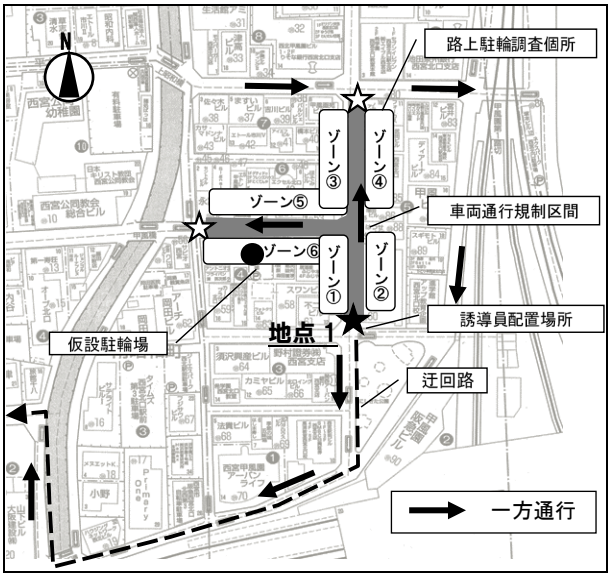

図-5 「ゆっくり天国」の実施エリア

(2) 「ゆっくり天国」の実施効果

a) 交通状況の結果

交通規制により迂回した自動車は，東側800台，西側48台，合計848台であり，そのうち約４割がタクシーであった．（図-6）

また，1時間当たり100台以上の自動車をメインストリートへ流入することが回避できた．（図-7）

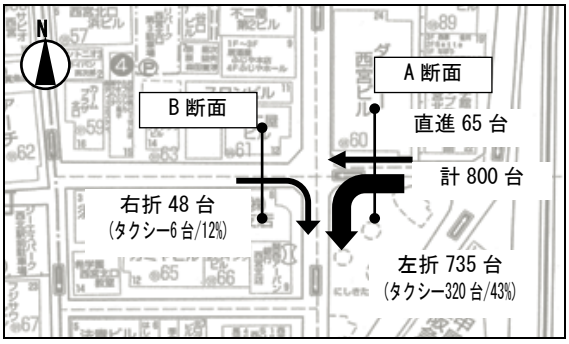

図-6　地点１自動車の交通量結果

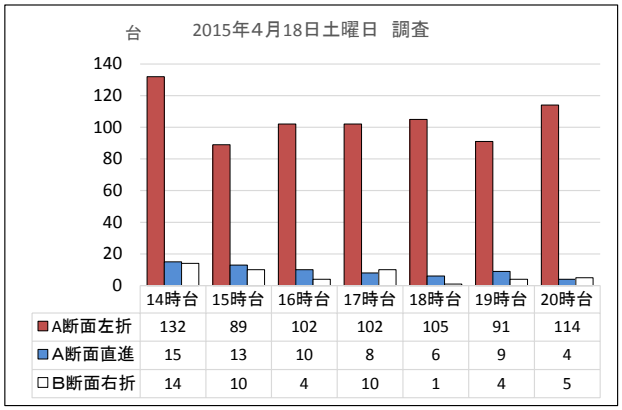

図-7　地点１　方向別時間別交通量

仮設駐輪場の利用は183台であり，そのうち従業員の利用は26台であった．利用者には好意的に受け止められたが，翌5時まで営業している店があり，利用時間の設定方法が課題として残った．

b) 来訪者のヒアリング結果

来訪者調査は，14時～17時，17時～21時に分けて通行人に声掛けし，回答用紙にシールを貼ってもらった．

ゆっくり天国を実施した感想は，「安心して歩けた」が多かったが，「にぎわいが生まれた」は少なかった．（図-8）また，ゆっくり天国の実施時期は，家族連れが多い昼の時間帯では，「毎日でも」が最も多かったが，飲酒客が多い夜の時間帯では，「バルの時だけ」が最も多く，来訪者の形態の違いにより差が出る結果となった．（図-9）

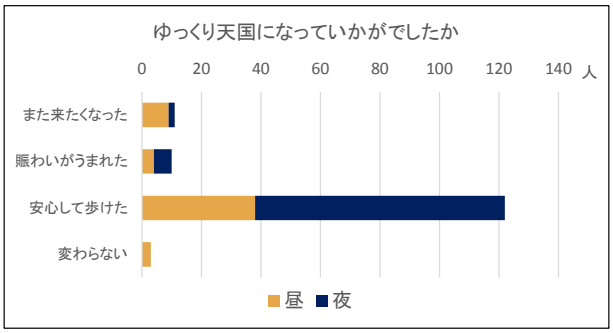

図-8　ヒアリング調査結果-1

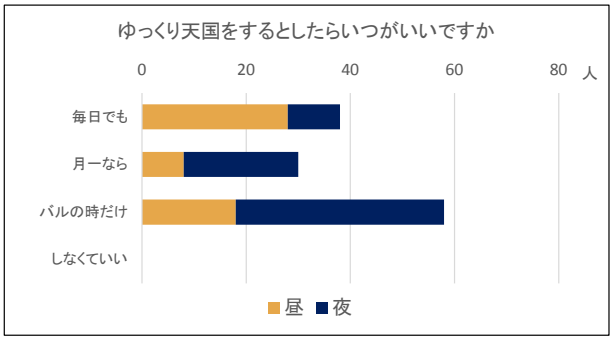

図-9　ヒアリング調査結果-2

c) 「ゆっくり天国」の実施効果

①安全・安心に関する現状と問題点

平成27年5月23日（土）に実施した交通量調査の結果，幅員6m のメインストリートでは17時～21時の4時間で，約5千人の歩行者通行がある．合わせて，車や自転車の通行，放置自転車がある．そのため，歩行者は車が通行すると歩くスペースがなくなる状況である．

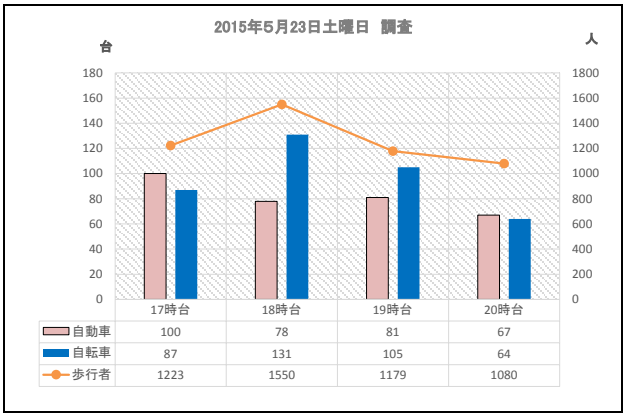

図-10　一般的な土曜日の通行量

しかし，通行する車はタクシーや塾への送迎が大半を占めており，必ずしも商店街を通行する必要がないものである．また，周辺の駐輪場は定期利用により満車状態であり，商店街の来訪者や従業員用の駐輪場が整備されていないことも放置自転車が多い原因の一つである．

この結果，狭いスペースに歩行者，放置自転車，自動車が輻輳し歩行者が安心して歩けない状況である．

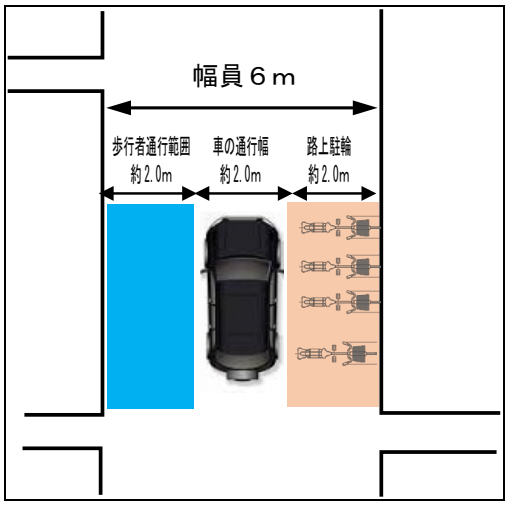

図-11　メインストリートの状況

②歩行環境改善効果

ｱ）歩行者，自転車が輻輳する歩行環境の改善

車が通行しないことで通行人は普段より安心して笑顔で通行していた．（図-12）

通常時

ゆっくり天国実施時

図-12　通常時と実施時の状況

ｲ）放置自転車の解消

仮設駐輪場の設置と啓発活動により，通常夜遅くなるにつれ放置自転車が増加するが，当日は普段に比べ大幅に減少した．特に常時人が立っていたメインストリートの放置自転車が減少した．（図-13）

この結果，地域と商店街に対し，対策を実施すれば放置自転車が減少することを実証できた．

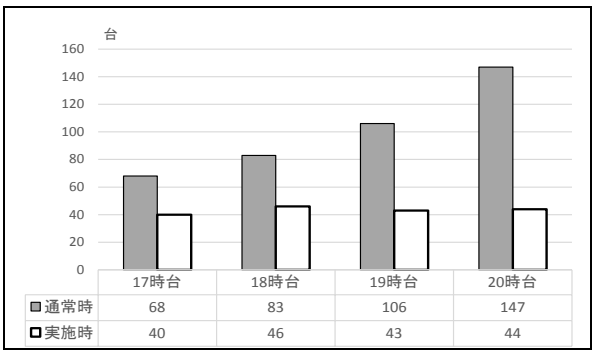

図-13　放置自転車の状況

ｳ）路上での呼び込みの解消

商店街では，風紀を乱す路上での呼び込みが問題となっていたが，「ゆっくり天国」実施時間中は呼び込みが現れなかった．これは，当初考えていなかった効果であり，安心して歩ける道づくりに繋がるものであった．

この結果，「ゆっくり天国」の実施により，安全で安心して歩ける道づくりの実現が実証できた．

③商店街への効果

「ゆっくり天国」実施前後に実施した商店街組合員へのアンケート調査結果より，実施前には反対していた人もいたが，実施後は全ての人が，「良かった」「継続した方が良い」と回答しており，実施効果を実感してもらえた．（図-14）

一方，商店街組合員が実施前に期待していた，「にぎわいと客の増加」について，「にぎわい」は実感したが，「客の増加」を実感したものはいなかった．（図-15）

d)　ゆっくり天国実施にともなう問題点

当日は，安全で安心して歩ける道路が実現でき，にぎわいあふれる商店街となったことから，地域や来訪者には効果を実感してもらえた．しかし，実施した中で次の問題点もあった．

・商店街組合に加盟していない店舗は非協力的であった．
・一部の人を除き，商店街の協力が見えなかった．
・ゆっくり天国の実施が客の増加につながることを商店街組合員に実感してもらえなかった．

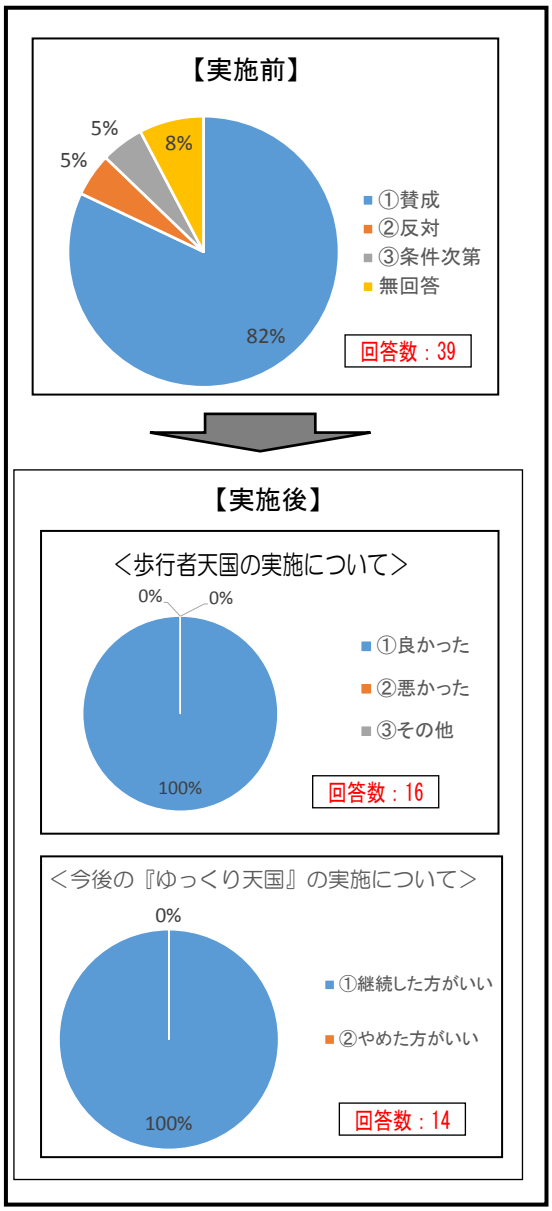

図-14 ゆっくり天国実施について

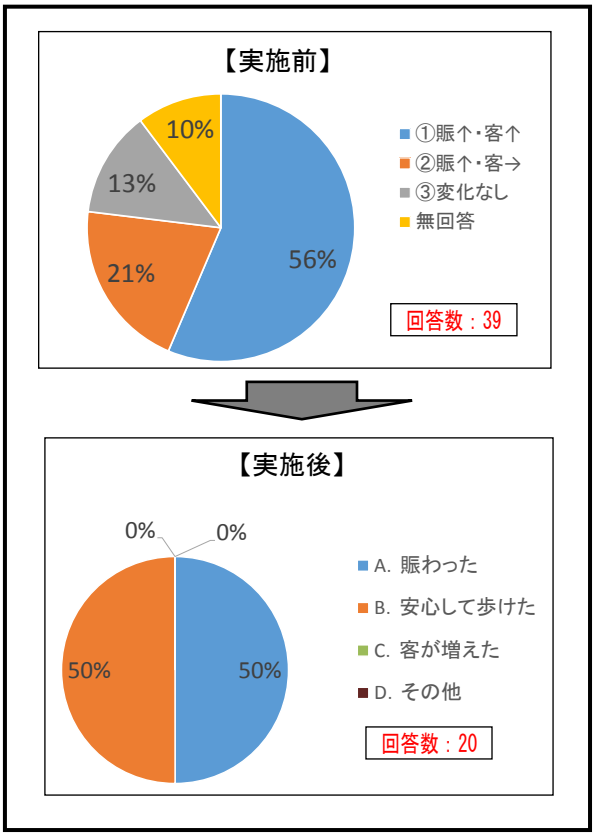

図-15 期待していた効果

5. 得られた知見と今後の課題

以下では，今回チームが主体となって実践した交通社会実験「ゆっくり天国」と，実験後のチームの地域へのまちづくり支援活動を通じて得られた知見と今後の課題について整理する．

(1) 第 1 回「ゆっくり天国」の実施による知見

チームが平成26年に初めて「にしきた商店街」の将来像と整備方針を地域へ報告した際には，地域の関係者や商店街から期待を得ると同時に，交通規制や仮設駐輪場整備については，その実現性や効果に対し疑念も持たれていた．しかし，第1回「ゆっくり天国」を通じて，チームが行政や関係機関との協議を支援し，具体的に対策を実施し，効果を示せたことにより，対策を実施できる自信を地域にもたらすことができた．

また，この社会実験の実施により，当初の仮説「地域と行政の橋渡しをする役割を担う専門的組織・人材が必要である」との認識が間違っていないことを示すことができた．さらに，交通規制を実施しても地域に弊害を与えないことを検証することができた．

一方，商店街が実施前に期待した商店街（各店舗）の利益に通じたかどうかについては，今回の社会実験では検証することができなかった．

このように，漠然と将来に対する不安を抱いているのに，その対策に向けた第一歩を踏み出せない地域に対して，まちづくりの専門家が具体的な支援を実施することは，地域がまちづくり活動を進めていくための有効な手段になると考える．

(2) 地域住民と商店街がめざす方向の温度差

第1回「ゆっくり天国」実施後の地域へのヒアリングを通じて，今までは自動車の通行規制などできないと思っていた地域の関係者が，まちづくりの専門家が主体となって社会実験を支援したことによって，自分たちでも交通規制は実践できるということへの理解につながった．

また，車両通行規制と放置自転車対策を実施した

際の商店街の姿を見ることによって，歩行者が安全に安心して歩ける道路空間の必要性を実感してもらうことができた．

その一方で，第1回「ゆっくり天国」の後，チームはクリスマスに合わせて，第2回「ゆっくり天国」の企画・実施を地域の主体で進めようとしたところ，取り組み経過の中で，地域における立場の違いによって，地域住民と商店街関係者とでは，「ゆっくり天国」に対するとらえ方に違いがあるということが明らかになった．（表-2）

表-2　地域住民と商店街の立場の違い

	地域住民	商店街
目的	安全や安心に通行できる環境	にぎわいや利益に繋がる
支障	特に生じない	荷捌きできない
協力体制	誘導や見廻りなど実施できる	忙しい時間帯であり，人を出すのは難しい
実施時間	外出が多い昼間時に実施したい	客が多い夜間に実施したい

a)　地域住民（にしきた街づくり協議会関係者）

・普段から生活の中で商店街を利用しているので，安全かつ安心して歩ける道路空間への期待は大きい．

b)　商店街（にしきた商店街関係者）

・安全や安心の効果は実感できたものの，それが自分たちの商売にどのように繋がっていくのかは疑問である．
・「ゆっくり天国」は単なる商店街のイベントであり，果たして継続性があるのか．
・商店街組合に加盟していない店舗の取り組みに対する考えは全くわからない．

このように，地域住民の組織である「にしきた街づくり協議会」と営利を目的とする「にしきた商店街」とでは，立場上の違いから，めざす方向性について双方に温度差がある．その上，人手不足という面から，商店街が単独で社会実験を実施するのは，現実的には難しいことが明らかになった．

これらから，双方にある温度差を詰め，お互いに妥協点を見いだしていくことが必要であることがわかった．

今回，社会実験を実施したことにより，地域とともにまちづくりを進めるためには，施策に効果があることがわかっていても，地域における立場により得られる効果に対する評価の違いが生じることによりまちづくりへの協力に温度差が生じることは，地域で活動してきたチームとして，新たな気づきであった．

(3) 地域を一体化させる地域のコーディネーターと組織の必要性

クリスマスに合わせて実施しようと試みた第2回「ゆっくり天国」は，にしきた街づくり協議会への協力を求めずに，期待していた効果にさほど関心がなかった商店街組合と協議を行って取り組んだため，残念ながら企画段階で実施をあきらめざるを得ない結果となった．チームが最初から，歩行者が安全で安心して歩ける道路空間創出の効果を実感したにしきた街づくり協議会を中心に協議を行っていれば，クリスマス時の第2回「ゆっくり天国」が実施できたかもしれない．

企画段階で「ゆっくり天国」を断念せざるを得なかったことにより，外部からきたまちづくり専門家では，地域内における関係者の立場の違いまでは把握できなかったことが反省点として挙げられる．

このように，今回のチームの取り組みを通じ，まちづくりの専門家の支援だけでは，地域が一体となって継続的にまちづくりをマネジメントしていくことは難しいということが明らかになった．また，行政とコンサルタントが主導で進めるまちづくりでは，地域が自主的に動かなくても良く，任せっきりになってしまうことから，結果的に持続しない場合が多く見られる．

一方，エリアマネジメントの観点で考えると，地域力を高めるための活動の中心に「新たな公共性」を担う NPO などの様々な組織，主体の登場も必要である[3)]とされているが，現在の「にしきた」は既存の組織の中で苦慮している状況にある．

すなわち，まちづくりの専門家の支援だけではなく，まちづくりへの思いを持った地域のコーディネーターとなる人材と組織が必要だということであり，今回のチームの取り組みを通じ，これらを地域の中で育成することの必要性を痛感したことは，まちづくり支援の次へのステップが見えてきたものと考えている．

(4) 今後の課題

交通社会実験の実践を通じて得られた知見と評価と課題への対応については，表-3に示す．

「ぶらぶら寄り道したくなるにしきた商店街」という将来像の実現に向けた取り組みを継続するには，地域住民や商店街が主体となって，まちのマネジメ

ントを進める必要がある．

そのためには，まちづくりを行う担い手の受け皿となる「にしきた街づくり協議会」と「にしきた商店街」が一体となり進めるべきであるが，地域が有する課題を解決しまちづくりを進めていける人材の発掘と育成が必要であり，地域の既存組織における運営の工夫とともに，それをサポートするまちづくりの専門家の支援が必要と考える．

また，依藤ら[4)]によれば，まちづくり活動が持続的に行われるためには，活動を実施するために担い手を受け入れる器としての組織が存続する必要性が指摘されるとともに，重要なことは，「ゆっくり天国」のような実践的な活動が積み重ねられること，そして活動する中で形成される人と人とのネットワークにより，担い手が継承されていくことだと述べられており，既存の組織を活性化し，地域においてまちづくりへの思いを持った人材が集まる組織を育成することも必要だと考える．

一方，地域主体でまちづくりを進めるためには，人的支援やある程度の資金的な支援が必要となる．このため，地域主体のまちづくりを進めていくためには，行政においても，地域がまちづくりの初期段階で人的支援や資金的な支援をうけやすい制度づくりが今後の課題となると考える．

表-3　得られた知見と今回の評価

項目	知見	今回の評価
(1) 第1回ゆっくり天国の実施による知見	①地元の人に対しては，まちづくり提案をできるだけ分かりやすい形にして伝えることが必要である．	・提案の内容は，地域の人に実感してもらえ，社会実験までまちづくりを進めることができた．
	②まちづくりの実践には，「地域と行政の橋渡しをする役割を担う専門的組織・人材」が必要性である．	・社会実験を実践することにより，まちづくりには「専門的組織・人材が必要である」ことを示すことができた．
	③社会実験では，必ずしも実験前に想定したことが検証できるとは限らないため，その点を関係者に事前に理解してもらうことが重要である．	・実験前に想定された車両規制による弊害が生じなかったことは示せたが，ゆっくり天国が店舗の利益に通じたかどうかは検証できなかった．
(2) 地域住民と商店街組合のめざす方向の相違点の存在	①地元の中でも地域住民と商店街組合では，めざす方向の温度差があるため，それぞれの組織の特性に配慮したマネジメントが必要である．	・地域住民と商店街がめざす方向に差があることを，第2回「ゆっくり天国」を企画する中で気づいたが，もっと前に気づくべきであった．
	②組織により相違があることを踏まえた上で，双方が共通で取り組める活動を作り出すことが重要である．	・今回でいえば，「安全や安心」が店舗の増収につながることを証明できれば，地域住民と商店街組合が更に一体となり「ゆっくり天国」に取り組むことができると考える．
(3) 地域を一体化させる地域のコーディネーターと組織の必要性	・まちづくり専門家の支援だけでは，まちづくりが進まない．地域の中で，コーディネーターとなる人材を発掘し，育成することが必要である． ・コーディネーターとなる人材とともに，まちづくりへの思いを持った人材が集まる組織を育成することも必要である．	・地域の中に核となる人材がいないと，一過性の社会実験で終わることが多いと推察される（行政とコンサルタントだけで進める場合など）． ・現在の地域住民組織，商店街組織では，まちづくり活動を持続的に行う受け皿としては厳しいものと考える．

6.　おわりに

本稿では，商店街の活性化をめざした実践的まちづくり支援に向けて，課題解決に向けた第一歩を踏み出すきっかけとして，まちづくりの専門家が地域を巻き込んで交通社会実験を実施した事例を紹介した．

その成果として，現実的に難しいと考えていた車両通行規制や放置自転車対策の仮設駐輪場設置の社会実験を実施することで，歩行者が安全で安心して歩ける道路空間の創出がもたらす効果や，自分達でもまちづくりを実施できるという期待感を地域住民や商店街に示すことができた．また，まちづくりの目的とする方向が異なる地域の組織と商店街の関係者に対し，同じ方向を向いて一体的にまちづくりを進めていけるよう誘導していくことの難しさも明らかにすることができた．

日常から人手不足な「にしきた商店街」が単独でま

ちづくりを実施することは難しく，地域住民の組織である「にしきた街づくり協議会」の協力は不可欠である．

そのため，我々チームは，まちづくりの専門家として，今後地域の課題を解決し地域が主体となってまちづくりを持続的に進めていけるよう，支援・誘導していく手法を模索していきたいと考える．

なお，年末のクリスマス時に実施しようと考えた「ゆっくり天国」が商店街主導では実施できなかったことを踏まえて，今年も4月23日（土）の「にしきたバル」に合わせて行う第2回「ゆっくり天国」の実施については，にしきた商店街組合及びにしきた街づくり協議会と協議を行ったうえで，実施主体をにしきた商店街からにしきた街づくり協議会に変更して実施されることになった．

この第2回「ゆっくり天国」は，地域が主体となって実施するという意味で，昨年実施した第1回「ゆっくり天国」の取り組みから一歩前進したと考えている．第2回「ゆっくり天国」の実施結果を踏まえ，今後も持続的に「ゆっくり天国」を実施されることを期待したい．

謝辞：今回ゆっくり天国実施にかかり，アンケート調査等に協力いただいた商店街組合の皆さま，ゆっくり天国実施効果発表の場及び意見交換の場をいただいた，にしきた街づくり協議会，にしきた商店街関係者の皆さまのご協力，再生塾にしきた商店街チーム全員の皆さまのご支援，ご協力に心から御礼申しあげます．

参考文献

1) 樋口一雄・尾﨑友彦・庄司宜充・谷口幸治・冨山育子・後藤正明・本田豊：地域とともに取り組む商店街づくりに向けた新たな方策に関する一考察～時間軸に着眼点を置いたまちづくりの提案～，土木計画学研究・講演集，Vol.49，CD-ROM，2014
2) リクルート住まいカンパニー「2016年版みんなが選んだ住みたい街ランキング関西版」
3) 小林重敬（編），エリアマネジメント地区組織による計画と管理運営，pp247，2008
4) 依藤光代・松村暢彦・澤田廉路：地方都市の商店街活性化におけるまちづくりの担い手の継承とその要因に関する研究-水木しげるロードをケーススタディとして-，都市計画学会・都市計画論文集，Vol.46 No.3，October，2011

Consideration of the way of the practical “Machizukuri” support in order to aim at revitalizing a shopping district

Kazuo HIGUCHI, Tomohiko OZAKI, Yutaka HONDA, Masaaki GOTO